

わたし の 兵 隊 手 帳 (一七) 赤 谷 明 海

へ昭和二〇年十一月八日の項のつづき

○十一月八日 体重測定 三六、一〇〇(昨)十〇、六〇〇)

期待してゐた程も増へてゐなかつたが、少しでも増せば気持は楽である。先づまづ気長に待つこととしよう。

○図書館設備のないこの病院で読書はなかなか出来ない。どんなつまらない雑誌でも、たまに手に入ると、隅から隅まで、早く読むのがおしい様を気持で読んで行く。然し読むしりからすぐ忘れてしまふ程どれもこれも内容がない。その中最近借りた沖野岩三郎と云ふキリスト教関係の人の著になる「八沢浦物語」と云ふ小国民向の書は、珍らしく文章もよく、簡明で、真面目な本であり、気持よく読むことが出来た。(一一、八)

○血沈(一時間一八〇。二時間一二七)

近頃、食欲も順調、排便も快適となつて、血液が出なくなつた。然し一方、胸の方が変調を来し、三日程前から夜横になつて寝ると左背肋骨の内側が痛み、特に咳をすると激痛がある。盗汗、不眠は相変わらず。(一一、一

〇)

○十一月十五日 体重測定 三六、一〇〇(脏へへー)、一〇〇)

最近微熱が続いてゐるが食欲は減退してゐないのに、体重が増えないのは不審であり、心細い。

○正義や愛や同情は常に人生に存在する。けれどもそれは絶えず鍛へられることによつて立派になつていくのである。  
—— 石坂洋次郎、暁の合唱、後篇

○敗戦後、首相官邸下へ東久邇宮稔彦が宣言された敗戦理由の第一条が「国民道徳の墮落」であつたとか。誠に至言である。単に国民道徳と限定するよりも、更に広く日本人の人間としての道徳性の下劣さである。実にこれを根本原因とせずして外に何があらう。内地に於けるへの生産面に於ける隘路の事は委しく知るべくもないが、さしあたり軍隊、病院の生活を見てみよ。多言不要である。(一一、一五)

○十一月二十二日 体重測定 三六、二〇〇(脏へへ十)、一〇〇)

週の初め熱発があつたが後半回復、食欲も旺盛である。後送者が決定した。内科だけで八百名に上るとか。すべて護送、独歩の患者で、担送患者は全部選に入らない。今度のは、今までの様にうはさだけのものではなく、検便も三度に亘つて行はれ、近日中にへ揚子江をへ下る筈である。内地へ直航とか云はれ、羨しくあるがこれも仕方がない。自重して時を待つばかりである。(一一、二一)

○先日、内山が便所の中で絶命し、而も彼が護送患者であつた事から、担送は勿論護送の一部も室外に出る時は必ず独歩患者の付添を要する事になり、夜便所へ行くのなど不便で仕方がない。ところで今朝方、又護送の清水が死んだ。常に茫然としてゐるために皆からからかはれ、死ぬ少し前まで腹が痛いとうなつてゐたのに、「やか

ましい」とか「大さうさうに云ふな」とかどなられ、飯干上等兵の如きは、額を三、四回をぐりつけ、「注射をしてやつた」等と云つてゐたが、それから幾時もなく死んでしまつた。あはれな死様であり、幾度云つても残酷な独歩の連中の振舞がうらまれる。(一一、二三)

○十一月二十六日午前九時三十分第一報発せらる。同日隊長殿の診断あり、「るいそうへ原漢字。やせおとろえる、の意、甚しきを以て注意を要す」。まさか通報患者にならうとは想はなかつたが、この病院の通報は相当程度を下げて考へてよく、特に最近の護送患者の死による軍医殿の慎重な処置とみてよく、左程気にもとめてゐない。然し家の者に心配をかける点から云へば小さい問題ではない。母親がなげくだらう。でもここで生き永らへて、無事に故郷に帰る事さへ出来れば償ひもつくことだらう。(一一、二六)

へ通報は院内処置だけだつたらしく、家への通知はなかつた。へ

○十一月二十八日、第三十号室へ転室。日へテーペー。結核、菌が検出されたらしい。通報と云ひ、転出と云ひ、情ない事ばかりだが、左程気は落してゐない。咳は相変らず続き、盗汗、不眠も絶えないが、身体全体の調子としては、以前と何等変りがない。ただるいそうへ原漢字、甚しく、昨二十九日の体重測定も

三五、六〇〇(へー、六〇〇)

の如き、あはれな結果を示し、漸次チヨウへ凋落の傾向をもつてゐる。然しいくらやせても、大事に扱へばまだ生命はもちこたへられる。その間に後送の順が廻つて来るのを待つばかりである。(一一、三〇)

○二、三日続いた雨空の寒い日も、久し振りに陽の光を見る様になつたので、午後の一とき、急に弱つた足を曳

づつて、階上三五号に中井上等兵へ前出。大阪府の人を訪ねる。この病院には外にこれといつて何かを依頼出来る様な人もあらず、中井さんにはあれこれと願つてもみたいのだが、これも自分の性分として、自然引込思案になつてしまふ。然し襦袢、袴下へパッチの員数外を手に入れてくれる様にだけは頼んでおいた。それ程寒くなつて来た。昨年の今頃北陵での日々が想ひ出される。特に三〇号へ移つて来た最初の日など、開放された窓から吹き込む風の下で、病衣一枚にくるまりながらどうしても温まらない。がつかつの瘦へせし足をかかへ込みながら、寝台の上で丸くなつてふるへてゐた。寝台で掛蒲団が一枚しかない、下から風が入つて、床板にぢかにねてゐるよりは余計寒い。(一二、二)へ三十号室は隔離病室。ここは寝台が並んでいた。

○三十号の空気は二十七号よりはるかに感じがよい。知り合ひもなく、又寝台と寝台とが離れてゐるので隣りの者とも口もきかず、淋しくはあるが以前の部屋の様には騒がしくもなく、実に静かで神経が昂ぶらなくてよい。総員三十二、三名のうち、下士官が九名も居り、外に准尉さんが一名ゐて、その他の兵も年をとつた者が多く、皆落ちついてゐる。食事の分配も比較的公平で、左程ひもじい思ひもしない。勿論、特食へ症状に応じた特別食やその他の分配で、幾分か不公平な点もあるが、やり方が二十七号の様に卑劣ではなく、極めて鷹揚で自然なので、此等も何等気にさはらない。脚気食を今まで貰つてゐたが、此方ではくれなのままに、さいそくもせずそのままにしてゐる。先方の感情をささいな事で害したくもなし、無茶な差別もつけずに担送患者にも分配してくれる並菜へなみさい、普通のおかずの量で辛抱できるからでもある。

十二月一日から二食制が朝と晩の二回に変更になつた。朝食が遅く夕食が早くなる訳だが、我々にとつてはど

ちらでもいい。この様に変つたのは食糧の割当が減つたため、従つて今までは三食分を二食にあげてみたのを、今度から二食分しか上らない事になる訳だが、事実へ実際へ我々に配られる量は、以前と何等変らない。要は部屋々々の分配が問題である。(一二、三)

○十二月六日 体重測定 三六、一〇〇(へ+)〇、五〇〇)

但しこの数字は、襦袢等をつけて計つた結果だから決して増えてはゐない。二、三日前から急に食欲がなくなり、腹工合も変になつた。今日のところどうやら回復の傾向にあるが、まだ三分食程度である。身体は倦怠感が増し、四肢に力が入らず、便所へ通ふさへふらふらである。何時後送になるかわからないが、その日までわが身が保つかどうか、甚だ心細い。(一二、七)

○十二月も追々更けてゆくが、案外、外界の状景は変らない。梧桐の葉は早く枯れて落ちはじめたが、それでもまだ枯れながら枝にひつついてゐる葉もある。乏しい種類の植木ながら、柳その他すべてまだ青い色を見せ、紅葉の秋を見ずに来てしまつたが、この調子では、全然裸木ばかりの風景になるのはまだ相当後らしい。(一二、七)

○真夏の太陽が広漠たる草原を照してゐる。午後の一時か二時頃であらうか。人の影は勿論、風さへ杜絶え、動くものの姿としては何も無い。かかる時に、この広い草原の一角に、僅か草の葉がゆらいだと思つたとたん、一匹の蛙の生命が終りをつけた。貪欲な舌をちろちろ出しながら、蛇がもとの姿勢にかへり、あとは同じ様に太陽がかんかん照りつけてゐるだけで、何の動きもない。蛙が死なうが死なないでゐようが、大局は何の変りもない。

そのあはれな生をなげくものもなければ、悲痛の嘆きに耳をかす者もない。我々の生命もかくの如きものであらう。私一箇にとつて、どれ程の愛着や未練があらうとも、自然の力の前には、一陣の風程の動きさへ見せない。如何にあせりもがいてみても、所詮空寂の「無」に帰せねばならない我々の宿命ではある。だからと云つて、さう簡単にその宿命に甘んずる事は出来ない。「生への執着」それは如何に根強いものだらう。ただ「生命が欲しい」とか「生き永らへたい」とか云ふものではない。もつと具体的に云へば、今一度、親や兄弟、朋輩の顔を見たい。今一度家にかへつて茶粥をすすつてみたい。だからそれが叶ふまでの生命があつてほしい。あはれな内容ながらこれ以外にはない。今一度！ かかる種類の願望は、何時までも今一度を繰返すものではあるが、ここに人間の感情の「不合理も通り越した」特異な点があるのだらう。今一度！ 再び家のしきいへ原漢字、門十或ゝをまたがない限り俺は絶待に死なない。(一一、九)

○十二月十三日 体重測定 三八、〇〇〇(へ+ゝ一、九〇〇)。

食欲回復、気分良好、先づまづ順調である。

○先賢、先哲の名句、金言も、結局は、彼等が何々であると断定する文句の次に、「と思ふ」なる辞を付加しなくてはならない。絶対的真理、そんなものは考へられない。

○蠅がまだうようよしてゐる。動作に活潑性が無くなつたが、よくもまあ、生き延びてゐる事だ。

○梅肉エキス(青梅ヲスリツブシ、滓ヲシボッタ汁ヲ、トロ火デ煮ツメル)

○昨十四日、遂に第一回後送が行はれ、江漢病棟から八百名程出たらしい。三十号室も大部分行つてしまひ、残

された者僅かに五名。皆通報患者ばかりである。通報にさへなつてゐなければ、前晩の追加に入れるところであるが、あつたが、それにも洩れてしまつた。皆の出たあとは誰も元気な患者はあらず、当然自分も起きねばならず、久し振りに食事の面倒等みてみたが、今日になると早速身体にこたへて足腰が痛むし頭痛がする。風邪でもひいたかもしれない。慎重々々。(一二、一五)

○後送が決まれば必ず行つてやると云つてゐた北野班長殿の顔も見えず、襦袢、袴下を頼んであつた中井上等兵殿も遂に来てくれなかつた。別れてしまへばかうなるのが普通かもしれないが、余りにもはかない人の情ではあると云ひたい。それにしても、人に頼りかけた自分の愚さが今更ながら悔ひられる。(一二、一七)

○軍隊生活でも病院生活でも戦友、患者の間に於いて、物品の交換や売買が自然である如く考へられるのは、考へる人の道徳的感受性の墮落であると思ふ。かかる人の著しい例を二十七号室の辻の上に見たが、大体に於いて町家出身の兵、特に昨年あたり入營の若い者の上に多く見られる様である。とても食べきれない食物の残りも「タダ」でやる位なら捨てる方がましだとする辻の如きは格別として「オイ、これ、を、や、る、か、ら、それ、を、く、れ」と平気で云ふ事の出来る人間が殆どなのが淋しい。物を貰ひ、その行為に含まれる厚意に感じて此方も物を贈る。それとはじめから商行為としてなされる物品の受贈とは、形に於いて同じでも、全然意味が違ふ。毎日と同じ屋根の下に暮す人々の間にへでは、厚意による、或は厚意がなくとも自分に不要だから人に利用して貰ふ、かういふ意味での物品の贈与はあつてこそ自然だが、商売沙汰はあらせたくない。それから、愛憎の如何にかかはらず、隣人の面前に於いて、我一人平気でものを食ふ事の出来る様な神経の持主も少くなつて貰ひたい。(一二、二二)

へ一九三九(昭和十四)年十一月一日 午後消印。はがき。墨書。

先日はお邪魔しました、岡本へ大無先生の歌集どこにあつたか教へて下さい、先生宅にもうなかつたから、与さ野晶子の京都に関する歌、小生所持の晶子集だけでも多い、書き抜いてあげようと思つたがあまり多いのでやめた、へ若山、牧水著「黒土」に二十首程ある、これは大塚先生にお借りしたまへ、松田へ常憲氏三径集に二十首程ある(比叡山の歌)比叡山は京都にしてもいいのだらう、それでよかつたら僕が書き抜いて上げる、赤彦も小生がひき受けて上げる、へ松田氏の秋風抄に相当あると思ふが、これは所持してゐない、へ島木へ赤彦はもうすんだのですか、知らして下さい

へ大塚五郎先生が、京都についての随筆を書かれるので、その資料集めの手伝いを原田がしていた。それで森田君にも所持の歌集中の該当するものをさがしてもらつた返事である。後の森田君抄出のものがわたしの手許に残っていないのは、そのまま先生に渡したからであらう

十一月三十日 午後消印。墨書。「松風童子」

おたより有難う、この頃 体はやつと平常に復したやうだが疲れ易い、大作の草稿をやつてゐるからかも知れない、絵にやせて夜さむ身にしむ端坐かな、梅若万三郎師の当麻はあまり好きとは思へなかつた、しかし立派で、これは自分の趣味から好きになれなかつた、その理由は又話す、同日の飯世鍊之丞氏の江口がとても素晴しかつ

た、最大の讀辭とまではゆかぬが、少しもたくまぬ素直な芸風はまだまさまさ頭にある、コンゴが姥捨外二番の独演とは恐れ入つた次第だ、師伝を受けぬ姥捨とはあいた口がふさがらぬ、世も末となりしよな 呆言多罪

十二月五日 付、午後消印。手紙。

文展の招待券御送り申上候

先日大塚先生とこへ行つて来た。十二月の研究会は漫談会にするとかいふお話し大変よろし。忘年会にした方が面白いだらう。

この頃は製作に追はれ 雑用で頭をいためて 何も製作出来ない。社会生活を営んでゐる以上、それに関した用事は仕方がないとは思ふけれども、そんなものを離れてゆつくりと しみじみと 製作がしてみたい。

短歌文学全集の吉井勇篇と、玉かぎろとを先生のところへもつて行つた。

タハムレニ

目の前に大原手弱女太つ尻出して尿(しし)する見れどあかぬかも

所用ありて津市へ行き阿漕平治の塚を見て来た。とり急ぎ 乱筆ゆるしたまへ 以上 十二月五日

十二月十日 午前消印。はがき。

前略 ぼくは大塚先生に対して一回もお歳暮をしたことがないが、きみの方はどうしてゐる？ もし今度西の研究会でもその様なことをまとめてゐるのなら 僕も仲間に入れてほしい。もし君が何時も持つて行つてゐるのならぼくも何時もお世話になつてゐることだから何かしたいと思ふが、時局柄もあるしどうしようかと思つてゐる

る。「色々」と考へてみるにつれて全く呑気でゐられない。生ぬるい境地に遊んでゐられない。へ渡辺へ華山へママの作品を通じて、あの時代、彼の生活を考へる時、自然に泣けてくる。文展を覬て来た。小野竹喬の作品がとてよかつた。今の新しい(?) 目から見れば古いと思はれ易いが、あれだけの絵はちよつとやそつとの苦勞で描けるものではない。咄哉州の浪に日の出、へ徳岡へ神泉の菖蒲、たしかに或るポイントをつかんでゐる、「さすらひ」はぼくはちつとも感心しない。むしろ嫌味を感じる。

へ大塚先生への「歳暮」はわたしもしたことがない、というより森田君のこのはがきで、そういうことをすべきなのか、と教えられたといったところ。たぶん、この後もしなかつたらう。先生とそこご家族に対し、弟子としてのわたしは迷惑のかけっぱなしだった。世間での礼をつくすこともせず、

十二月二十八日 午前消印。はがき。「洛北 夜来山房主」

愈々おしつまつたが お忙しい事と存ずる。小生も俗用多く弱り入る次第です。さて正月ともなれば 例年の如く大塚先生を訪問しようと思ふが、二、三日のうち何日の何時頃がよいか知らせて下され度し。元日は他家へ廻礼に出かける。貴殿の都合のよい時をみはからはれ度候、 今年紙の節約にて年賀状は欠礼申します。水がめの初会には何とか顔を出すつもり。当日は関西美術院へ行かねばならぬので、かち合つて大いに弱つてゐるので。先はお尋ね迄、

へ一九四〇(昭和十五年)年へ 『水鏡』一月号詠草。

夜の峰を鹿の越え来て茸喰ふとふ秋山深く我は来にけり 水尾

松風の音かと尚も聞き澄めば夜の時雨の近づくらしも

風出づればしきみへ原漢字、木十密の滑葉（なめは）さむざむとさゆれやまずも谷深くして

山陰に冷ゆる夕風わが触るる栗の朽木の肌あらあらし

戦死者の今宵は速夜と聞きにけり空也念仏（ねぶつ）の谷深くひびく

踏みゆく松の落葉は色さむし夜露はしとど香にたちて来ぬ

評。一種特異な風格と味とが感じられる。

一月二十日 夕付、消印不明。はがき。

先日はどうも有難う。（西の研究会の）会費をはらふ事をすっかり忘れて失礼しました。いづれお目にかかつた折にお渡しします。次の火曜日へ森田直一兄が来ますからは是非あなたも来て下さい。先日の拙詠についての諸家の批評 大いに不満足ですから それについての君の意見も聞きたく思つてゐます。

例へば 鷺のもろ羽にしても 全体から受ける感じを表現する方がいいと言はれたが それは一本遣入つた様に似て 間違つてゐはしないかと思ふ。何故なれば飛んでゐる鷺は大きく羽が見えるだけだからもろ羽が即ち全体となつて来るからです。風の中での歌のさむざむを白々としたら分裂の評は下せないが さむざむ、とした点について考へて下さい。へ「西の研究会」は、水産京都支社の歌会とは別に大塚先生を中心とした歌会  
『水産』二月号詠草。

故吉田少佐の墓に詣づ

蔭つくる木もあらなくにひようひようと吹き通る風に墓石（いし）冷えてゐぬ

掌わが触れてみし墓石（いし）の面（おも）その冷たさの身にしみけり

槇の葉の黒き緑の色さびて潮くさき風のここまてとどく

二月一日 午後消印。はがき。墨書。「洛北 夜来山房主人」

途中静岡の火災跡で一泊 帰洛しました、お暇あらばお遊びに、極寒は夜の外出ひかへてみますから 研究会は  
不参です

二月三日 日 付、午後消印。はがき。墨書。

帰宅後何かととりまぎれて今迄水壘を見なかつたが 今開いてみて君の作品を読んだが あれは非常な傑作だ、  
今迄の君の努力の実がやうやく熟したわけだ、今後も益々奮闘を祈る 大塚先生も喜んでられることと思ふ  
不尽 松田へ常憲君の作品もとてもいいものだと思ふ

へ森田君がほめてくれたのは、原田の「夢殿」と題する次の六首。夢殿は秋かげるふの真青（さを）なるに權ふ  
ものか群るる翅虫／流らふる光の中に湛として眼を瞑づる御仏の像／夢殿の深きしじまに流らふる時間の翳はつ  
ひに消えにき／われのみがうつし身ゆゑに嘆くがにさびしくて仰ぐ御仏の像／いにしへの人もさびしくありにけ  
むこの御仏のみ面の笑みへ「のみ面の笑み」は選者の添削。原作は「を見じと秘（かく）しぬ」／うつそみの  
心に沁みて恋ほしかり御仏の唇のくろへ原漢字、黒十幼へずめる朱（あけ）

二月七日 日 付、午後消印。はがき。墨書。

今朝突然森田直一君のオバさんから手紙が来て、君と僕とに会つて話をしたいことがあるから日時と場所とを知

らせてほしいさうだ、多分息子さんが三中を受験するについての相談だらうと思ふ、僕の方は何時でも行けるが君の方は試験で多忙だらうと思ふが如何はからつて置かう？ なるべくなら会つて上げてほしい、至急御返事を待ちます、時日もかなり切迫してゐることだからなるべく早い方がよい、次の日曜の午後は如何ですか 草々  
不  
一

二月 八 日 午後消印。はがき。墨書。

森田直一兄のオバさんの事 色々御迷惑の事と存じます、貴兄からのお便りまだ頂かないが 日曜なら都合つきませんか、もし都合がつけば 同日、京津電車三条終点に午後一時半頃から二時迄の間に待つてゐてくれませんか、日曜午前迄に返事なければ行つてゐます、それで都合がつけば御返事いりません、不  
一

『水蓮』三月号詠草。

元旦桃山御陵へ参拝す

玉砂利を踏む感触の足裏ゆ伝はる時し身はしまり来る

冴えとほる冷氣の中に冬空はいよいよ重くあられこぼすも

何時となく空やや晴れて見さくるや木幡の沼に霧うごくみゆ

御陵の薫の杉生は緑ふかしその秀の上の暗き雪雲

三月 六 日 付、午後消印。はがき。墨書。

昨日はわざわざお尋ね下さいましたのに不在で失礼しました、小生も一度お目にかかり度思つてゐましたのに大

変残念に存じました、

この頃は外出するのは稀で 籠居して製作に熱中してゐますが矢張り 休み休みしなければ体の方が続かず困ります、それに絵もいいものが出来ないの、その点でも気がむしやくしやして来ます、まア 気長にやることだと思ひました 大塚先生の御歌についても言ひ度いことがありますがお会ひした時にします、一度伺ふつもりですが 何時かわかりません、待たないで下さい

三月 十二 日 午後消印、速達。はがき。

前略 森田直一兄の甥御、先日相談を受けた亀尾安彦君が今朝十一時急逝された。遺骸はまだ大学へ病院へから帰らない様だが 多分 今夜自宅で お通夜だと思ふから 一度行つて上げて下さいませんか、遅かつたら明日でもいいでせう。僕も今から行きます。草々

『水鏡』四月号詠草。

たち迷ふさ霧の中ゆぬば玉の黒き牛ひき人あらはれぬ

山深く帰鳥の声も絶えはてて黒きさ霧の去来あはただし

蕭々と風たつ山に身は一人夜鳥驚く声ききてをり

評。 真実感が乏しい。

たかどのに眺むれば／乱るる山 平らの野 煙りつつ光薄づく／煙りつつ光薄づく／鴉みを帰し後の／夕  
空に角笛きこゆ／香とだえ酒の気残るおぞましき／西風に促されあをぎり落ちぬ／あをぎり落ちぬ／あは  
れまた秋景色／あはれまたさびしさよ

「憶秦娥」は、唐の李白の「秦娥夢断秦楼月」の句を含む作から始まったとされる詞調で、双調、四十六字、前後段各五句、それぞれ一、二、三、五の句末に仄字で韻をふむが、二、三句は疊韻、すなわち同じ文字でふむ。これが定格。のちに賀鑄が平字で韻をふむ別体をはじめた。李清照のは定格である。題を「桐」とする本があるけれども、これが桐を詠ずる作でないこと、すでに先人がいう。

#### 臨高閣

「臨」とは高い所から見おろすこと。「閣」とは四方を望む高い台である。唐の王維の友人を送る作に「臨高台」がある。「きみを送ると高処にたてば／川おびて野のはるけしや／日暮るれば鳥は還るに／行くひとの去りやまぬかな」漢代の楽府「臨高台」を本歌とするが王氏のは本歌とほとんど関わりがないほどに違っている。李清照の初句は王氏の句いに付けている感じがせぬではない。それなら愛する人の旅立ちを送る趣向。あるいは九月九日に共に登高したときの光景とみてもよい。

#### 亂山平野煙光薄。煙光薄。

けわしく乱れたつ山、ほうばくとひろがる平野。夕もやが一面をおおひはじめ、その向うに光の薄れた陽が落ちてゆく。この二句はなかなかいい。

棲鴉歸後、暮天聞角。

寝ぐらにつくからすの群が帰ってしまった夕暮れの空に、軍営の角笛の響き。

この前段は、出征した男が、前の年の同じころの女との別れを想いながらのいま見ている光景ともとれる。読者の方でさまざまに感情や趣向を投入できる幅をもつのが詞というジャンルの特色だ。詩でもすぐれたものはそのうした奥行きをもつものだが。

さて後段。これははつきり、去って返らぬ人を思う女のやるせなさをうたう。

斷香殘酒情懷惡。

部屋に同じこともって、気をまぎらせようと杯をかたむけているうちに香炉の香も消え、おのれのといきともにはき出される酒のにおいの味気なさ。

西風催観梧桐落。梧桐落。

ばさ、とあおぎりの葉が落ちる。いやな、不吉な、響きである。一本は「西風」の二字を欠く。

又還秋色、又還寂寞。

あの人のかえってこない。還ってくるのは、また秋の景色、さびしさばかり。

佳句を含み巧みな作である。ただ、李白の菩薩蛮の趣きを憶秦娥の調べにうたいかえた感じがせぬではない。

本歌があまりにもすばらしいので、ちょっと<sup>と</sup>そっとの佳品では見劣りがしてしまふ。ある本では無名氏の作となつてゐる。その無名を他に当てる方もなく李清照のものとして定まつてはいるが、彼女の作中では上位にはすえ

かねよう。「詞論」を書くよりずっと前の作かもしれぬ。

この詞の韻字、闇(カク)薄(ハク)角(カク)悪(アク)落(ラク)奠(バク)は 呉の尾音をもち、韻書では「葉」字で代表される入声である。( )内に記した日本に伝えられた音にはそのおもかげが遺っていて、韻のふみ工合がよくわかる。ところが中国の今の標準音だと *ge, bo, jué, é, juó, mo,* となつて韻をふんだことにはならぬ。入声の *ㄛ* の尾音ののこっている地方、ことに蘇州あたりの人が吟じると、詞の韻の響きあうところが微妙にうたわれて心にしみる、という話を聞いた。わたしはまだその幸福を味わつたことはない。夢のなかで音の幻を聞くばかりである。(一九八四年十一月二日)

す れ ち が い ーランカーの岸辺で (二) i 原 田 憲 雄

李賀はわが伝教大師最澄・弘法大師空海と同時代の人である。ふたりが唐に留学したのは八〇四年。最澄三十歳、空海三十一歳、そのとき李賀は十四歳だった。

最澄の船は九月一日、明州に着き、かれは一行と別れて天台山に向かい、台州で『摩訶止観』の講義を聴き、十月、天台山で牛頭一派の禪法を受け、翌年三月、円頓菩薩戒を受け、四月、越州で真言の秘密灌頂を受け、五月乗船、八カ月の留学を了えて帰国した。かれは都長安には行かなかつた。

空海の船は八月、福州長溪県に着いたが上陸を許されず、十月、福州に回航し、十二月下旬ようやく長安に入

った。明けて八〇五年の二月、かれは一行と別れて西明寺に移った。寺は延康坊（地区名）の西端にあり、その西北の西市と接している。西市は都の二大市場の一つで、ここはシルクロードの東端、当時の歴史に名のあらわれたあらゆる国から人々がやって来て、商品を中心に文明・文化を交換していた。西市の北の三地区には祇祠・波斯胡寺が散在した。祇祠はゾロアスター教・マニ教の、波斯胡寺はキリスト教の一派景教すなわちネストリアニズムの寺院であつたらしい。ゾロアスター（ザラツストラ）教はアフラマズダにつかえる宗教で、彌亮三郎の「大師の時代」に次のようにいう。

其のアフラは梵語のアスラ *Asura* と同一語根で、梵語の方では、阿修羅即ち非天と云ふ風に凶悪の神と云ふことと後世では変じて居りますが、ゼンド語の方では、善神を云ふことに使用せられて居ります。此の方がアスラまたはアフラの本来の意義であります。現に梵語でも吠陀の文学には、アスラ即ち阿修羅を善き神と云ふ方に用ひた例があると記憶します。殊にアフラマズダは、至大至善の神で全知全能の神であり、また精神界の光明の神であります。この神に対して、*Anromainyus* と云ふ悪神が戦をして居ります。此の悪神は精神界の暗黒を代表する神で、世界は以上の二神の争闘であると見るのがマズデイズムの見方で、聖賢が世に出でて、善神を扶けて悪神を退ける任務を有したもので、ゾロアスターも其の一人であります。

空海はこれらの寺院や、そこで行われる祭式をも見たことであろう。かれの入唐の目的は『大日経』の学習にあつたといわれる。その経の説主大日如来、すなわちヴァイローチャナが、かつて、アスラとよばれたことをもしかれが知っていたら、そうしてこの異国の異教の神アフラマズダが、やはりアスラであることを知つたら、と

いった、仮定をおくと、さまざまの想像をさそう。

五、六月の交、かれは青竜寺に惠果を訪い、その門に入り、六月中旬、胎藏界の、七月上旬、金剛界の、八月十日には阿闍梨位伝法の灌頂を受けている。青竜寺は長安東端の新昌坊にあり、その北にも祇祠があった。

惠果はこの年十二月示寂。翌八〇六年一月葬儀を営み、空海は碑文を作った。四月、越州に行き、内外の経書を集め、八月帰国の途についた。二十年の予定だったといわれるが、二年足らずでかれの留学は終った。

空海が帰国した八〇六年、李賀は十六歳だった。十四、五歳のかれはすでに詩を作り、そのあるものは人々の評判に上っていただろう。そのころ、かれの家は、洛陽に近い昌谷という村にあった。父が官僚だったから、その父とともに長安へも往き来したであろう。街角で、あるいは東市か西市の雑踏の中で、空海と袖の触れあうことがあったかもしれぬ。空海が詩文を交した相手の一人馬総は、李賀の父李晋肃の上官姚南仲に仕えた人であり、師の韓愈の友人でもあったから、後に、それらの人から日本からのこの特異な僧の話聞いたかも知れぬ。

空海と李賀とが会っていたら、年齢の相違をこえて談笑したろう、との想像もされなくはない。しかし、空海の側にも李賀の方にもふたりの接触した証しはまったくなく、この同時代人はともに近い空間を歩みながら、すれ違いに終った。

惠果の師の不空、梵名アモガヴァジラまたはアモガジュニャーはランカーの人であった。十四歳で金剛智（ヴァジラジュニャー）に就き、海路を経て、七二〇年、中国東都の洛陽に着いたとき十六歳だった。一説では、かれは北インドのバラモンの子で、早く父をなくし、陸路中国に来て金剛智の弟子となったという。いずれにして

も金剛智の付法の弟子であったことは確かで、七四二年、師の遺命で海路インドに向かい、ランカーに立ちより、国王に歓迎され、仏牙寺に宿り、諸尊の密印等の指授をうけ、真言の経論五百部を贈られ、インド諸国を巡歴し、七四六年、長安に帰還、大小乗の経論とランカー国王の表などを皇帝に進献した。ランカー国王の名がシーラメグハで七四一―七八一を治世とすることを補氏が前引書で考証している。不空の孫弟子である空海は、ランカーの密教の伝統をも受けついでいた。そして、当時の長安では、ランカーは、心理的には日本とならぶ近隣の国であつたらう。

さて、空海が帰国した八〇六年、李賀はたぶん父の死にあい、以後あしかけ三年の喪に服する。喪があげ、官吏登用試験を受けようとして邪魔がはいり、それでも別の筋から奉礼郎という官職につき、長安で役所づとめを始めるのが八一〇年。空海は京都の高雄山寺で国家のための最初の修法を行なうのだが、李賀は机上に『楞伽経』をおいて「二十歳 心はとづくに朽ちはてた」とつぶやいている。

空海の修法は、日本人の精神生活を新来の密教によって変革しようとする、雄大な企図と強烈な決意をはらませていた。李賀のつぶやきには、暗い絶望と凄酸なデカダンスのにおいがする。だがこの暗さと酸っぱさは、目の前のいわゆる現実が信じきれずこの世界に順応しきれなくなった魂に、鋭い誘惑と激しい震盪をもたらす。誘惑にさからい震盪に耐えようとしているうちに、人はかれの絢爛たる感覚の内部の恐るべき思想の深層にぶつかって、茫然とし、愕然とし、慄然とする。同時代の人たちだけがそうだったのではない。かれの死後一一六七年、やがて二十一世紀を迎えようとするいま、東洋といわず西洋といわず、崩壊にむかおうとする世界の危機的様相

に敏感な人達が、むさぼるようにかれの詩を読むのは、その暗さと酸っぱさが、人間の根性にこべりつく差別観の源をさしつらぬき、正義をよそおう諸思想の混乱錯綜を照射するからではないだろうか。

漢 訳 楞 伽

李賀が「陳商に贈る」詩を書いた八一〇年の春、すでに大詩人として国外にも名の知られた白居易（楽天）が次の詩を作っている。

夜の涙は闇に消え 月の明るい窓のカーテン

きみは断腸のおもいだろう 牡丹の庭で

人の世のこのかなしみは葉なんぞでなおせない

四巻本の楞伽経があるだけだ

（元嶺君の「亡妻をいたむ詩」を見て）

白氏がこの詩を贈った相手の元氏は、やはり当時の大詩人で、李賀の師韓愈の同僚だった。きみが奥さんの菩提をとぶらい、いまの悲しみから立ち直るために頼りうるのは、この経のほかにはない、といって示したのが、ほかならぬ楞伽経だった。白氏もすでに楞伽経を読んでいた。ただ、それは「四巻」本だった。四巻本以外にも楞伽経があったのか。

楞伽経は、中国では、五世紀から八世紀にかけて四回翻訳された。その題名・巻数・訳者へその漢字表記へ、訳処・訳時・（略称）は次の通り。

楞伽經

四卷 ダルマラクシャへ疊無識

姑藏 四二一—四三三 (涼訳)

楞伽阿跋多羅宝經

四卷 グナパドラへ求那跋陀羅

金陵 四四三 (宋訳)

入楞伽經

十卷 ボディールチへ菩提流支または菩提留支

洛陽 五一三 (魏訳)

大乘入楞伽經

七卷 シクシャーナンダへ実叉難陀

洛陽 七〇〇—七〇四 (唐訳)

涼訳は七世紀末にはすでに散失していたらしい。ついでに、梵本(サンスクリット本)、日本訳・英訳の主だったものをあげておこう。

The Laṅkāvatāra Sūtra, ed. by Bunyu Nanjo, Kyoto, 1923, (南条本)

Saddharma-Laṅkāvatāra-Sūtram, ed by P. L. Vaidya, Darbhanga, 1963, (V本)

現代語訳・楞伽經 三井晶史 東京 一九二一 (三井訳)

邦訳梵文入楞伽經 南条文雄・泉芳璟 京都 一九二七 (南条訳)

The Lankavatara Sutra, A Mahayana Text, London, 1932, (鈴木訳)

梵文和訳・入楞伽經 安井広済 京都 一九七六 (安井訳)

梵本は十九世紀のなかごろネパールなどで発見され、その数種をまず校訂しほとんど定本と目されるのが南条本。この本はその後に出、南条本を参照しているが、南条本の周到には及ばないようである。南条・鈴木・安井の三訳はいずれも南条本を底本とし、漢訳三本、チベット訳二本、さらに中国・チベット・日本の諸注釈を参照している。このほか部分的な訳はかなり多く出ているが、必要に応じて触れることにする。なお、チベット訳二本

の、一つは梵本に近く、一つは宋訳からの重訳だろうといわれる。梵本もチベット訳も、その成立は漢訳諸本よりおくれるらしい。

ひとつの經典でありながら、なぜ巻数が違うのか。それは、經典の成立・伝誦・編集・翻訳にまつわる事情がさまざまに異り錯雑するからである。仏教の經典は、かつては、釈尊すなわちゴータマ・ブッダの説法をそのまま文字にしたものだと思われた。現存する最も古いものも、言語としてはゴータマが生きて語った時と処のものでないことが証明されている。ゴータマの教えは、その死後、弟子や孫弟子によって、部分々々が伝えられ、ある時期ある人たちがそれをまとめ、まとめられたものが口ずさまれ、その弟子たちに伝えられた。ゴータマの教えを受けたのは僧だけではなく、在俗の人も多かった。それぞれの伝える教えは、根本は同じであっても、受けとめかたはさまざまで、それらの違いが伝持する經典に反映した。そのいずれを正統とするかについての意見の相違が、いくつかの教団を生み、教団の対立抗争が、新しい經典や注釈の成立をうながす。これらの經典の編集者・作製者は無名の多数者で、短小な經典はともかく、大部の經はあるいは数年、あるいは数十年数百年の間に製作、伝持、増広編集されたもので、なかには中国に来てから最後の形にまとめられたものもある。

漢訳、すなわち中国語による仏典の翻訳は二世紀の中ごろに始まった。もたらされた經典をともかく訳していたのだから、インドにおける教団や学統の違いなどにもかかわりなく、ひとつの經もまとまった全体をそろえて訳したわけでもない。これは仏典の漢訳にかぎったことでもない。今日の日本の洪水のような出版事情の中でも、たとえばサルトルのほとんど全著作が翻訳されているのに、その五分の一ほどしかない韓愈の全集は訳され

ていない。部分的な翻訳はあるけれども。だから同じ名の経も訳されたものに長短があり。題名すら訳者によって異なるので、事情に通じないうちは、同じ経だということもわからない。現にさきにあげた楞伽經の諸本の題名がその通例である。

唐訳に關与した法藏（六四三—七一二）は、中国華嚴宗の大成者賢首大師として知られる学僧で、『入楞伽心玄義』一卷を著した。楞伽經の現存の注釈では最も古い。梵本についても解説している。それによると、楞伽經の梵本は三種類に大別される。一は大本で十萬頌。開皇三寶錄によればコータンの南方山中にある。二は中本で三萬六千頌。西域で（？）梵本から訳すのはみなこの本で、トカラの三藏ミトラシャーインタがインドで受持したのもこれだ。西国（西北インド？）には現にナーガールジュナの作った釈論があり、中本を解釈したものだといふ。三は小本で千頌余り。四卷本はこれをさらに省略したものだ。

右の「頌」は「シュローカ」のことで、サンスクリット文学における韻律の一種。八音節の四句で三十二音節からなる詩句。ただし、ここでは經論の散文を数える単位として使っている。漢訳『大般若經』のはじめの四百卷に相当する梵本を「十萬シュローカの般若」といふ。それならここにいう中本でも漢訳して百卷前後にならう。現存する漢訳三本とは離れすぎる。「十萬頌の大本」は誇張だとして、いまの学者は誰も信じない。わたしは、速断は避け、この伝えを心のはしにとどめておく。ともかく、漢訳三本は、小本のうちの三つの異本をそれぞれに訳したものであるうか。そのうち、四卷本は小本をさらに省略したもの、と法藏がいつていた。ところが、これについてもいまの学者は疑いをはさむ。

（一九八四年十一月五日）